

看護学生の高齢者イメージの変化

—老年看護学概論の授業前・後の比較—

滝川由美子*, 吉本知恵, 横川絹恵

香川県立医療短期大学看護学科

Change of Nursing Student's Elderly Person Image after the Lecture of Gerontological Nursing

Yumiko Takigawa*, Chie Yoshimoto and Kinue Yokogawa

Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

Key Words : 高齢者 (elderly person), 老人 (old person), イメージ (image), 看護学生 (nursing student)

はじめに

現代社会においては家族構造の変化により核家族が約6割を占めている。このことから、入学してくる学生の背景として高齢者との同居体験が少ないため、日頃高齢者と接する機会が少ないことが予測される。また、高齢社会における問題のみが強調され取り上げられること、効率を重んじる近代社会以降

老いを否定的に捉える傾向にあることなどから学生の高齢者に対するイメージ（以下高齢者イメージ）には一般的に偏りがある。保坂ら¹⁾は「大学生が抱く老人イメージは、どちらかといえば否定的である。」と述べている。また、イメージとは人によって異なり行動はイメージに依存する。高齢者に対するイメージも学生一人ひとり、あるいは教員との間でも異なることが考えられる。教育はまず学生のも

*連絡先：〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護学科

*Corresponding address : Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,
281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa, 761-0123, Japan

つイメージを始点としそこから出発することが必要である。また、イメージは情報によっても変化するため、学習のなかでどのような情報をどのような形で提供するかが教育側の重要な課題となる。老年看護学の学習過程では、はじめに健康で社会生活を営んでいる高齢者を正しく理解することが重要である。看護学生の高齢者イメージの他の研究²⁻⁴⁾を見てみると、老年看護学実習の前後での高齢者イメージの変化に着目したものは数多くあるが、老年看護学概論の授業の前後での高齢者イメージの変化を見たものは見当たらない。

そこで、老年看護学概論の授業開始時に学生の高齢者イメージを知るためと、授業終了後、イメージがどのように変化したかを把握するために調査を行った。その結果今後の老年看護学の授業展開の示唆を得たので報告する。

方法

1. 対象

調査に同意を得られた本短期大学看護学科

1年次生49名

2. 調査内容および調査方法

1) 調査内容

(1) 高齢者イメージに影響する個人的要因

- ① 年齢
- ② 性別
- ③ 祖父母との同居経験の有無
- ④ 同居の祖父母との接触頻度・会話内容
- ⑤ 学生にとっての祖父母の存在
- ⑥ 同居の祖父母以外の高齢者との接触頻度・会話内容

(2) 高齢者イメージについて

- ① 学生が高齢者とする年齢について
- ② 学生が高齢者という言葉からイメージする色について（自由記述式）
- ③ 高齢者イメージ調査

高齢者イメージの調査には保坂ら¹⁾が考案したSD法によるイメージのスケールを使用した。これは高齢者イメージについて「否定的－肯定的」と対をなす50の項目からなる。7段階評定で、4点は肯定的、否定的どちらも無い段階で、これを境に3点（やや）、2点（かなり）、1点（非常に）と否定的イメージが強くなり、一方5点（やや）、6点（かなり）、7点（非常に）と肯定的イメージが強くなるとした。

2) 調査方法

1回目は老年看護学概論の授業開始前の1年次10月に学生に調査の意図を説明し、自記式調査票を配布しその場で回収した。2回目は老年看護学概論の授業が終了し、高齢者に関する図書を読み高齢者へのインタビューが終了した1年次1月に学生に調査の意図を説明し、自記式調査票を配布し数日後に回収した。1回目、2回目ともに回収率は100%であった。

3. 分析方法

高齢者イメージは各項目毎に平均値と標準偏差を算出した。また、50項目を老年看護学に関わる教員3名の協議に基づき類似項目ごとに『外観性』・『行動』・『能力』・『性格』・『幸福感』・『関係』・『総合評価』の7つのカテゴリーに分類した。結果は分布により正規性の検定、等分散の検定を行ってノンパラメトリックデータであることが確認されたので老年看護学概論の授業前・後の比較にはWilcoxonの符号付き順位検定を、祖父母との同居経験がある群と同居経験のない群との比較にはMann-WhitneyのU検定を行った。なお統計ソフトはSPSS for Windows.Ver.9.0を使用した。

4. 対象者の属性

分析対象となった学生49名は全員女子であり、平均年齢は18.7歳（±0.6）であった。対象者のうち祖父母と現在同居しているものは15名（30.6%）、現在は同居していないが過去に同居した経験があるものは9名（18.4%）、全く同居経験がないものは25名（51.0%）であった。また、同居経験もなく祖父母以外の高齢者と話す機会もないものは12名（24.5%）であった。

結果

1. 自由記述式の調査結果について

「高齢者とは何歳からだと思いますか」の質問では授業前は60歳から64歳が10名だったが授業後は3名と減少した。65歳は22名から25名とやや増加した。また、授業前は70歳が13名いたが授業後は7名に減少し、75歳以上が3名から11名に増えた。授業後で「特に年齢制限はない」と答えた学生が1名いた。理由は「個人差があるから」と答えている（表1）。

次に「高齢者という言葉から何色をイメージしますか」の質問には、授業前は茶系が18名、灰色14名、白9名の41名で地味な色合いが71.9%をしめており、授業後では茶系12名、灰色11名、白7名の30

表1 高齢者のイメージ年齢

授 業 後		
年 齢	人 数	割 合
60	9	18.4
61	1	2.0
65	22	44.9
70	13	26.5
72	1	2.0
75	2	4.1
80	1	2.0

授 業 後		
年 齢	人 数	割 合
60	3	6.1
65	25	51.0
67	1	2.0
70	7	14.3
72	1	2.0
75	5	10.2
80	6	12.2
その他	1	2.0

表2 高齢者のイメージカラー

授 業 前		
色	人 数	割 合
茶系	18	31.5
灰色	14	24.6
白	9	15.8
肌色	5	8.8
緑系	3	5.3
青系	2	3.5
橙系	2	3.5
山吹色	1	1.8
紫	1	1.8
黒	1	1.8
無回答	1	1.8

授 業 後		
色	人 数	割 合
茶系	12	24.5
灰色	11	22.5
白	7	14.3
緑系	6	12.2
黄色系	5	10.2
桃色	2	4.1
青系	1	2.0
肌色	1	2.0
紫	1	2.0
暗い色	1	2.0
その他	2	4.1

表3 カテゴリー別の授業前・後の比較

カテゴリー一名	授 業 前		授 業 後		前 後 差	Wilcoxon の符号付き 順位検定
	平 均 値	標準偏差	平 均 値	標準偏差		
外観性	3.28	0.62	3.60	0.55	0.32	*
行動	3.19	0.51	3.24	0.53	0.05	
能力	3.69	0.58	4.00	0.66	0.31	*
性格	4.00	0.60	4.20	0.43	0.20	*
幸福性	3.55	0.57	3.96	0.54	0.41	*
関係	3.38	0.72	3.78	0.65	0.40	*
総合評価	3.21	0.61	3.52	0.52	0.31	*

* $p < 0.01$

名で61.2%と減少した。緑系, 黄色系は6名から11名に増えた。またピンク色が2名みられた(表2)。

2. SD法による質問調査の結果について

1) 全体について

授業後は50項目のうち「騒がしい-静かな」を除く49項目が肯定的な方向に変化していた。また、全体の平均値をみると授業前が4.00, 授業後が4.35と高くなり35項目が有意に ($p < 0.05$) 肯定的な方向に変化した。7つのカテゴリーの平均値を比較すると『行動』<『総合評価』<『外観性』<『関係』<『幸福性』<『能力』<『性格』となり授業前・後ともに同様の順序を示し『行動』以外の『総合評価』, 『外観性』, 『関係』, 『幸福性』, 『能力』, 『性格』で有意差 ($p < 0.05$) がみられた(表3)。

しかしながら、全体に肯定的な方向に変化したとはいえ、授業前では4(どちらともいえない)以上の肯定的ゾーンを示したのは『性格』のみで、他の6つのカテゴリーは4未満の否定的ゾーンであった。授業後では、『性格』に加

えて『能力』が肯定的ゾーンとなった(図1)。

また、各項目において祖父母との同居経験がある学生と同居経験のない学生に有意差はなかった。

2) 各カテゴリーについて

(1) 外観性について

『外観性』の7項目の中で、授業前に肯定的ゾーンにあった項目は「だらしない-きちんとした」「貧弱な-立派な」「汚い-きれいの3項目であったが、授業後では「弱弱しい-たくましい」が肯定的ゾーンに変化した4項目となった。そして、授業前・後ともに平均値が最も低かったのは「地味な-派手な」で、最も高かったのは「だらしない-きちんとした」であった。

『外観性』の7項目においてはすべての項目に有意差 ($p < 0.01$) がみられ、最も変化したのは「貧弱な-立派な」の0.65ポイントであった。また『外観性』の授業前・後の平均値を比較すると、3.28から3.60と高くなった(表4)。

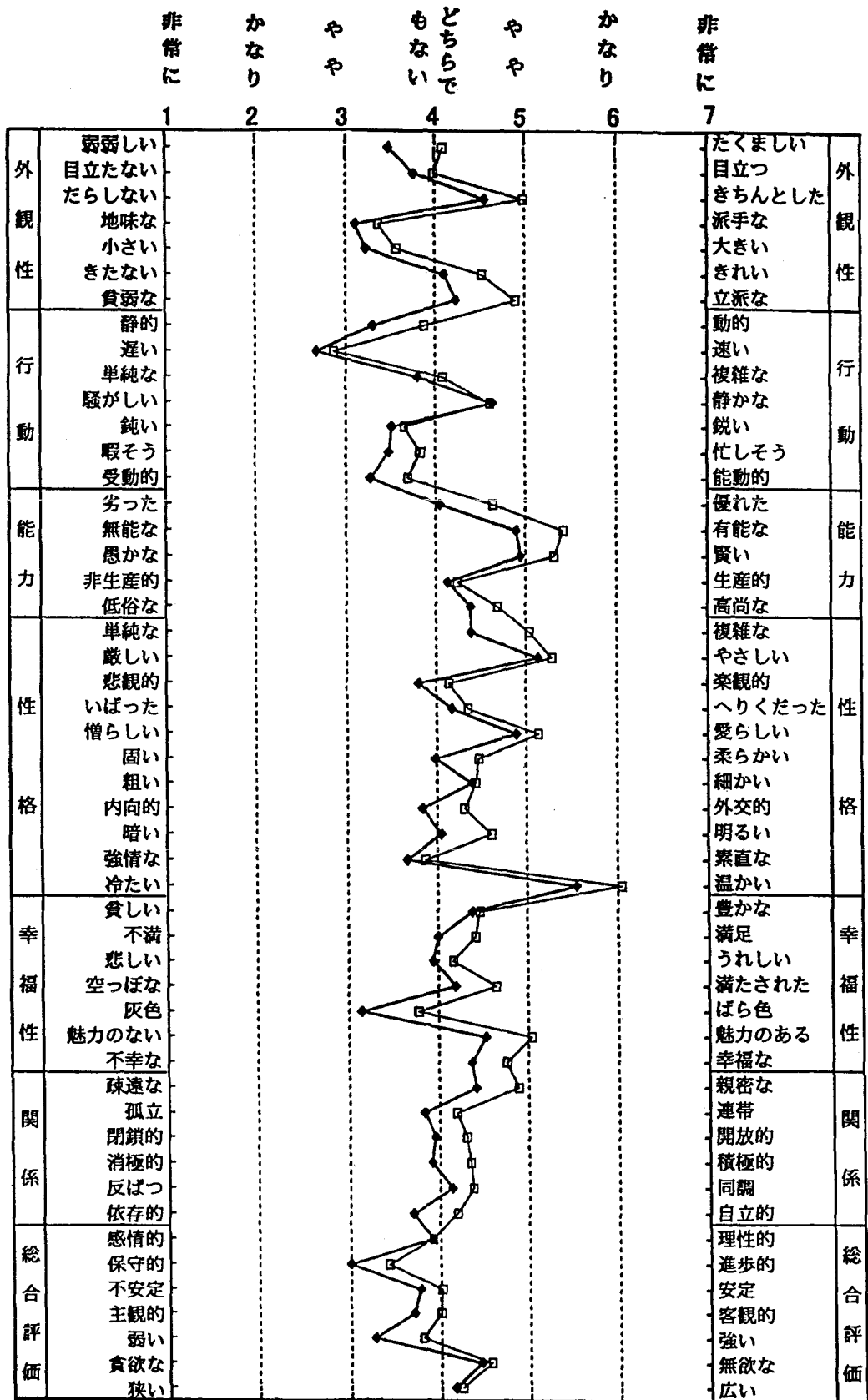


図1 各項目の平均評定値

表4 外観性カテゴリー

項 目 名	授 業 前		授 業 後		前 後 差	Wilcoxon の符号付き 順位検定
	平 均 値	標準偏差	平 均 値	標準偏差		
弱弱しい-たくましい	3.49	0.74	4.08	0.89	0.59	*
目立たない-目立つ	3.76	1.14	3.98	1.05	0.22	*
だらしない-きちんとした	4.55	1.28	4.98	1.19	0.43	*
地味な-派手な	3.12	1.28	3.37	1.32	0.24	*
小さい-大きい	3.22	1.16	3.57	1.27	0.35	*
きたない-きれいな	4.10	0.99	4.53	0.85	0.43	*
貧弱な-立派な	4.24	0.93	4.90	0.91	0.65	*

* $p < 0.01$

表5 行動カテゴリー

項 目 名	授 業 前		授 業 後		前 後 差	Wilcoxon の符号付き 順位検定
	平 均 値	標準偏差	平 均 値	標準偏差		
静的-動的	3.29	1.04	3.88	1.18	0.59	*
遅い-速い	2.67	1.04	2.86	1.05	0.18	
不自由な-自由な	3.80	0.99	4.08	0.98	0.29	
騒がしい-静かな	4.63	0.94	4.61	0.86	-0.02	
鈍い-鋭い	3.51	1.06	3.65	0.96	0.14	
暇そう-忙しそう	3.49	1.17	3.84	1.10	0.35	*
受動的-能動的	3.27	1.34	3.69	1.32	0.43	*

* $p < 0.01$

(2) 行動について

『行動』の7項目の中で授業前に肯定的ゾーンにあった項目は「騒がしい-静かな」の1項目であったが、授業後では「不自由な-自由な」が肯定的ゾーンに変化し2項目となった。そして、授業前・後ともに平均値が最も低かったのは「遅い-速い」で、最も高かったのは「騒がしい-静かな」であった。「騒がしい-静かな」は授業前に比べると0.02ポイント低くなっていた。しかし、授業前・後とも肯定的ゾーンであった。また「遅い-速い」は50項目のうち平均値が最も低かった。

『行動』の7項目においては、3項目に有意差 ($p < 0.01$) がみられ、最も変化したのは「静的-動的」の0.59ポイントであった。また『行動』の授業前・後の平均値を比較すると3.19から3.24と高くなったがカテゴリーのなかで変化が最も小さかった(表5)。

(3) 能力について

『能力』の5項目の中では、授業前・後ともに5項目すべてが肯定的ゾーンにあった。

そして、授業前・後ともに平均値が最も低かったのは「非生産的-生産的」で、最も高かったのは「愚かな-賢い」であった。特に「無能な-有能な」「愚かな-賢い」の項目は、授業後には平均値が5以上となった。

『能力』の5項目においては、4項目に有意差 ($p < 0.01$) がみられ、最も変化したのは「劣った-優れた」の0.59ポイントであった。また『能力』の授業前・後の平均値を比較すると3.69から4.00と高くなった(表6)。

(4) 性格について

『性格』の11項目の中で、授業前に肯定的ゾーンにあった項目は「冷たい-温かい」「厳しい-優しい」「憎らしい-愛らしい」「単純な-複雑な」「粗い-細かい」「いばった-へりくだった」「暗い-明るい」の7項目であった。授業後では「固い-柔らかい」「内向的-外交的」「悲観的-楽観的」が肯定的ゾーンに変化し10項目となった。そして、授業前・後ともに平均値が最も低かったのは「強情な-素直な」で、最も高かったのは「冷た

表6 能力カテゴリー

項 目 名	授 業 前		授 業 後		前 後 差	Wilcoxon の符号付き 順位検定
	平 均 値	標準偏差	平 均 値	標準偏差		
劣った－優れた	4.04	1.04	4.63	1.29	0.59	*
無能な－有能な	4.90	1.12	5.43	1.12	0.53	*
愚かな－賢い	4.94	1.09	5.31	1.04	0.37	*
非生産的－生産的	4.12	1.09	4.24	1.15	0.12	
低俗な－高尚な	4.39	0.98	4.69	0.96	0.31	*

* p < 0.01

表7 性格カテゴリー

項 目 名	授 業 前		授 業 後		前 後 差	Wilcoxon の符号付き 順位検定
	平 均 値	標準偏差	平 均 値	標準偏差		
単純な－複雑な	4.48	1.47	5.04	1.38	0.56	*
厳しい－やさしい	5.14	0.59	5.29	0.52	0.14	
悲観的－楽観的	3.80	1.07	4.14	0.98	0.35	*
いばった－へりくだった	4.16	1.02	4.35	0.86	0.18	*
憎らしい－愛らしい	4.88	1.21	5.14	1.12	0.27	*
固い－柔らかい	3.98	1.12	4.47	0.96	0.49	*
粗い－細かい	4.39	1.04	4.43	0.87	0.04	
内向的－外交的	3.84	1.51	4.31	1.29	0.47	*
暗い－明るい	4.04	1.32	4.61	1.02	0.57	*
強情な－素直な	3.67	1.26	3.86	1.02	0.18	
冷たい－温かい	5.55	1.02	6.04	0.98	0.49	*

* p < 0.01

い－温かい」であった。また、平均値が5以上の項目をみると授業前では2項目であったが、授業後では4項目となり、なかでも「冷たい－温かい」は6.04と50項目中最高値を示した。

『性格』の11項目においては、8項目に有意差 ($p < 0.01$) がみられ、最も変化したのは「暗い－明るい」の0.57ポイントであった。また『性格』の授業前・後の平均値を比較すると4.00から4.20と高くなった(表7)。

(5) 幸福性について

『幸福性』の7項目の中で、授業前に肯定的ゾーンにあった項目は「魅力のない－魅力のある」「貧しい－豊かな」「不幸な－幸福な」「空っぽな－満たされた」「不満－満足」の5項目であったが、授業後では「悲しい－うれしい」が肯定的ゾーンに変化し6項目となった。そして、授業前・後ともに平均値が最

も低かったのは「灰色－ばら色」で最も高かったのは「魅力のない－魅力のある」であった。また、「魅力のない－魅力のある」は、授業後では平均値が5以上となった。

『幸福性』の7項目においてはすべての項目に有意差 ($p < 0.01$) がみられ、最も変化したのは「灰色－ばら色」の0.64ポイントであった。また『幸福性』の授業前・後の平均値を比較すると3.55から3.96と高くなった(表8)。

(6) 関係について

『関係』の6項目の中で、授業前に肯定的ゾーンにあった項目は「反発－同調」「疎遠な－親密な」の2項目であったが、授業後では「閉鎖的－開放的」「消極的－積極的」「孤立－連帯」「依存的－自律的」の4つの項目が肯定的ゾーンに変化し全ての項目が肯定的ゾーンとなった。授業前・後ともに平均値が

表8 幸福性カテゴリー

項 目 名	授 業 前		授 業 後		前 後 差	Wilcoxon の符号付き 順位検定
	平 均 値	標準偏差	平 均 値	標準偏差		
貧しい-豊かな	4.39	1.08	4.47	0.94	0.08	*
不満-満足	4.00	0.91	4.41	0.92	0.41	*
悲しい-うれしい	3.94	0.87	4.16	0.81	0.22	*
空っぽな-満たされた	4.20	0.94	4.65	0.96	0.45	*
灰色-ばら色	3.14	0.98	3.78	0.92	0.63	*
魅力のない-魅力のある	4.53	0.91	5.04	1.02	0.51	*
不幸な-幸福な	4.37	0.83	4.76	0.75	0.39	*

* $p < 0.01$

表9 関係カテゴリー

項 目 名	授 業 前		授 業 後		前 後 差	Wilcoxon の符号付き 順位検定
	平 均 値	標準偏差	平 均 値	標準偏差		
疎遠な-親密な	4.41	1.26	4.88	1.24	0.47	*
孤立-連帯	3.84	1.43	4.20	1.17	0.37	
閉鎖的-開放的	3.96	1.37	4.31	1.15	0.35	*
消極的-積極的	3.92	1.15	4.35	0.93	0.43	*
反ばつ-同調	4.14	1.22	4.37	1.18	0.22	
依存的-自立的	3.71	1.22	4.20	1.18	0.49	*

* $p < 0.01$

最も低かったのは「依存的-自立的」であり、最も高かったのは「疎遠な-親密な」であった。

『関係』の6項目のうち4項目においては有意差 ($p < 0.01$) がみられ、最も変化したのは「依存的-自立的」の0.49ポイントであった。また『関係』の授業前・後の平均値を比較すると3.38から3.78と高くなった(表9)。

(7) 総合評価について

『総合評価』の7項目のなかで、授業前に肯定的ゾーンにあった項目は「狭い-広い」「貪欲な-無欲な」の2項目であったが、授業後では「不安定-安定」が肯定的ゾーンに変化し3項目となった。また、「感情的-理性的」は授業前・後ともに3.92で変化しなかった。そして、授業前・後ともに平均値が最も低かったのは「保守的-進歩的」で、最も高かったのは「貪欲な-無欲な」であった。

『総合評価』の7項目においては3項目に有意差 ($p < 0.01$) がみられ、最も変化した

のは「弱い-強い」の0.53ポイントであった。また『総合評価』の授業前・後の平均値を比較すると3.21から3.52と高くなった(表10)。

考察

老年看護学概論において老年期を「豊かな経験によって裏付けられた知識と生活の厚みという積極的な側面と、加齢によって種々の機能が低下し、心身ともに衰えていく過程にあるという消極的な側面が共存している」²⁾と捉えている。学生がどのような老年観をもっているかは高齢者に対する看護の質や内容に影響を及ぼす要因の一つと考えられる。学生が高齢者の積極的側面と消極的側面を正しく認識することが老年観を形成することに重要であると考え

実際に学生の高齢者イメージをみると『外観性』カテゴリーでは、加齢による外見的变化を肯定的に捉えており、高齢者を尊敬できる存在としていることが窺える。同時に高齢者が普段着ている服の色

表10 総合評価カテゴリー

項 目 名	授 業 前		授 業 後		前 後 差	Wilcoxon の符号付き 順位検定
	平 均 値	標準偏差	平 均 値	標準偏差		
感情的－理性的	3.92	1.24	3.92	1.21	0.00	
保守的－進歩的	3.00	0.87	3.43	1.06	0.43	*
不安定－安定	3.78	1.07	4.02	1.39	0.24	
主観的－客観的	3.71	1.06	4.00	0.94	0.29	*
弱い－強い	3.27	1.17	3.80	1.10	0.53	*
貪欲な－無欲な	4.45	1.48	4.57	1.30	0.12	
狭い－広い	4.16	0.92	4.24	1.03	0.08	

* $p < 0.01$

や身体機能の低下、健康障害などから目立たない、地味な存在であると思っている。

『行動』カテゴリーにおける否定的イメージについては、高齢者の身体的側面である運動機能の低下や活動能力の低下に、学生の視点が向いているためと考えられる。老化による身体的機能の変化は外見上の変化および機能上の変化となって表れるため、学生は一部を肯定的に捉えながらも全体として否定的イメージとなっている。

『外観性』や『行動』は学生が高齢者とあまり接する機会が少ないため外見の側面だけで捉えてしまう傾向がある。しかし、現実には高齢者との出会いを体験することによって多少なりともイメージが変化してきた。学生が高齢者に対して肯定的イメージを持つには高齢者とのふれあいや出会いの体験を授業に積極的に取り込んでいくことが重要だと考える。

『能力』カテゴリーにおいては高齢者の知的側面や人生経験の蓄積が役立つ総合判断能力などの成熟・発達した部分を肯定的イメージとして捉えている。田島ら⁵⁾も「高齢者の知的側面や情緒的側面ではかなり高い水準を保っている。ことに、想像力・統合能力・理解力などは、高齢者になってもほとんど低下しない」と述べている。学生は外見や否定的イメージからの連動ではなく高齢者の能力を正しく把握していることが窺える。

『性格』カテゴリーにおいては高齢者に対して学生は好意的に捉えている。しかし、否定的ゾーンの「強情な」は高齢者の特徴的な性格であり、老化の進行により適応能力が減退し、環境の変化に順応して行くことが困難になり高齢者は頑固・強情と受け止められやすい。学生も同様に高齢者を「強情な」と捉えている。

これらのカテゴリーは高齢者の知的側面や情緒的

側面を表わしているが、学生はこれらの側面を円熟しますます成長・発達していく部分として正しく認識していると考えられる。

『幸福性』カテゴリーにおいては、退職や家庭での役割の変化など、社会的に大きな変化のあった高齢者の生活を肯定的に捉えている。否定的ゾーンの「灰色」はカラーイメージと同様に高齢者の特徴である髪の色や服装の色などが大きく関与していると考えられる。しかし、授業前・後の変化が大きかったことは学生の視点が高齢者の外見から内面に向けられつつあると考える。

『関係』カテゴリーは授業後に全ての項目が肯定的ゾーンに変化した。それは学生がインタビューをした高齢者は健康であり、家族や友人のこと、地域での出来事や昔の話を生き生きと話してくれたことによると考える。今回のインタビューは、短時間だったことや高齢者が学生のインタビューという学習課題に協力的だったため楽しい話や教訓的な話題が主となり、高齢者の直面している悩みや不安などが十分に表出されなかったためとも懸念される。安達ら⁶⁾は「学生が捉えているイメージは高齢者の行動そのものを表現したものであり、その行動の意味を考えることにより『孤独』という状況が見えてくるかも知れない」と述べている。今後、高齢者の行動の意味にも着目できるよう関わっていくことが大切である。

『総合評価』において、否定的ゾーンにある「弱い」「保守的」は、他の研究でも否定的とされており高齢者のイメージの特徴と考える。しかし、授業後に肯定的な方向に変化したことは授業の成果と評価できる。

学生が抱く高齢者イメージを授業の前・後でみると全体像の大きな変化はみられなかった。学生は高

齢者をあたたかさや優しさがあつた長年の人生経験からいろいろな知識をもつた尊敬すべき存在としてイメージしている。一方では、行動が遅いことや髪の色が白髪になっていくことなど加齢による身体的な特徴から活動性や外見に対しては衰えが認められる存在と捉えていることが窺える。

保坂ら¹⁾の大学生を対象にした調査でも同様の結果がみられ、本学の看護学生も他の大学生と同様の高齢者イメージを持っていることがわかる。これは青年期の学生が高齢者を見る時の特徴と考えられる。

このような高齢者イメージは授業前に比べ、授業後は全体的に肯定的方向に変化していた。これらは講義で高齢者の身体的・精神的・社会的特徴を学習したことと、「老い」に関する図書を読んだことや高齢者に直接会つてインタビューしたことによつて変化したと考える。特に、一番大きく変化した「貧弱な一立派な」はインタビューで高齢者と話したことによりその人の思いや考え方を知つたことに起因すると考える。伊藤²⁾は「印象形成は新しい情報や接し方、つまり新しい体験によつて絶えず修正を受けイメージは作り変えられていく。学習や実習などによる新しい情報や体験によつて、学生の老人の全体イメージが変化し、結果として肯定的な方向に変化する」と述べている。学生が健康な高齢者と出会い生き生きと過ごしている姿を目の当たりにし、その個性に触れるという体験によつて新しい情報を得、授業前に持っていた高齢者イメージがより肯定的な方向に広がつたためと考える。そのことは学生が高齢者という言葉からイメージする色の変化にも表れている。授業前にはみられなかつた黄色系やピンク色が授業後にはみられ、これらの変化も講義や読書、インタビューの経験の結果だと考えられる。また、高齢者と同居経験のある学生は約半数いたが、ほとんどの学生は同居している高齢者と世間話しをする程度であつた。なかには挨拶程度のみという学生もいた。祖父母に悩みなどの相談をするという学生は2名しかいなかった。これらのことから学生は高齢者と同居はしているが、高齢者を十分に理解しているとはいひがたい状況である。このことは授業前的高齢者イメージが同居経験のある学生とない学生に有意差がなかつたことからいえる。学生が高齢者のイメージを形成する過程では高齢者との同居経験の有無よりも講義や読書、インタビューのような新しい情報や体験などが大きく影響するのではないかと考える。

老年看護は、老年期というライフサイクルの最終ステージにある人を現社会を支えた人生の先輩として尊重し、その人がその人らしくできるだけ自立した状態で人生の最後まで人間として誇りを持ちながら生活でき、安らかな死を迎えることができるよう援助することを目指している。

老年看護学を学ぶ過程において、学生が実習で対象を理解するときにも老年期にあるその人を衰退期にある無力な人ではなく、生き生きと生活していた人として捉え、障害のある部分ばかりに目を向けず人間として成熟期にある個性豊かな尊重されるべき人として受けとめることができるよう期待している。

川崎ら³⁾は看護学生と一般学生との比較研究で「看護学生は、臨床実習の中で、病院や特別養護老人ホームなどで病気やハンディキャップをもつ老人と接し、看護を行うことから一般学生よりも老人に対して否定的イメージを持っている」と述べている。確かに臨地実習においては病気や加齢から生活に支障をきたしている痴呆老人や寝たきり老人といわれる高齢者を対象に看護を展開することが多い。住みなれたわが家を離れ家族とも別れて暮らす高齢者に接し、学生がその人にとって「幸福とは何か」と自問自答するであろうことが予測される。それだけに実習前に学生が肯定的な高齢者イメージをもつことは、看護への意欲を高めその質や内容の向上に影響すると考える。

今後、臨地実習において障害を持った高齢者の看護を実践するとき、高齢者イメージがわずかではあるが肯定的に変化したことは、老年看護学実習の導入を容易にすると考えられ、看護の対象を理解するうえで意義がある。

まとめ

老年看護学概論の授業前・後における本学看護学生の高齢者イメージの変化を明らかにするため調査を行なつた結果、以下の結論を得た。

1. 高齢者イメージは『外観性』、『行動』、『能力』、『性格』、『幸福性』、『関係』、『総合評価』の7つのカテゴリーに分類された。
2. カテゴリー全てにおいて授業後には肯定的方向に変化した。
3. 肯定的イメージとして授業前・後ともに高齢者の人格的な成熟を認めている。なかでも授業後には知的側面において変化がみられた。

4. 否定的イメージでは、授業前・後のいずれにおいても高齢者の身体的老化や活動性の低下など高齢者の特徴が影響した。

5. 本学の学生は他の大学生と同様の高齢者イメージの傾向をもっており、これは青年期の学生が高齢者を見る時の特徴といえる。

6. 以上の結果より講義や高齢者擬似体験、読書、インタビューなどの体験が学生の高齢者イメージに影響を与えることがわかった。また、高齢者と深く関わる機会を意図的に設けることが老年看護学実習の導入や対象理解に有効な教育方法であることを再確認した。

おわりに

今回の調査では、高齢者との同居経験の有無と高齢者イメージの変化に差が見られなかったため、学生の背景の差による変化の違いなどについては検討しなかった。また、講義や読書、インタビューなどがイメージの変化にどのように影響するのか明らかにする必要がある。これらについて今後の継続課題として取り組んで行きたい。

文献

- 1) 保坂久美子, 袖井孝子 (1988) 大学生の老人イメージ -SD 法による分析-. 社会老年学, No.27: 22-33.
- 2) 山本洋子, 安藤詳子, 中武美江 (1998) 老人看護学実習で学生が学んだ内容に関する研究Ⅰ-学習内容と実習前後の老人に対するイメージの変化との関連-, 日本看護研究学会雑誌, 21 (3): 268.
- 3) 渡辺久美, 近藤益子, 太田にわ, 池田敏子, 前田真紀子, 太田武夫 (1997) 看護学生の老人施設実習前後の老人イメージ. 岡山大学医療技術短期大学部紀要, 8 (1): 85-90.
- 4) 大谷英子, 松木光子 (1995) 老人イメージと形成要因に関する調査研究 (1) 大学生の老人イメージと生活経験の関連, 日本看護研究学会雑誌, 18 (4): 25-38.
- 5) 田島桂子, 竹内孝仁 (1999) “系統看護学講座専門19老年看護学”, 医学書院, 東京, p.2-41.
- 6) 安達憲子, 荻野朋子 (1997) 看護学生の老人理解. 名古屋市立大学看護短期大学部紀要, 9: 141-148.
- 7) 伊藤孝治 (1995) 看護学生の老人イメージの変化に関する考察. 愛知県立看護短期大学雑誌, 27: 9-13.
- 8) 川崎未和, 大串靖子 (1997) 看護学生の老人のイメージと死に対する態度に関する研究, 日本看護研究学会雑誌, 20 (3): 220.

受付日 2000年3月21日